

研究計画

森内博正

私はこれまで、古典的結び目理論でも扱われてきたアンビエントアイソトピーによる、空間グラフの分類を行なってきた。私の作成した 7 交点以下の素な θ -曲線と手錠グラフの表は現段階での最先端であると確信している。しかし、最近 M. Chiodo, D. Heard, C. Hodgson, J. Saunderson, N. Sheridan の 5 人が、私と同様に代数タングルと平面グラフを利用する事によって 3 価グラフの空間埋め込みの 7 交点以下の表を完成させたようである。彼らは 2006 年に D. Heard が開発した Orb というコンピュータプログラムを用いて空間グラフの補空間の双曲構造に関する不変量を計算し、分類に役立てている。また、私が言うところの θ -多面体も G. Brinkmann と B. McKay が開発した plantri というコンピュータプログラムで数え上げたようである。8 交点以上の表については、Orb や plantri を用いると効率アップが望めるに違いない。

7 交点以下の θ -曲線と手錠グラフに対しては山田多項式で分類可能だが、8 交点以上の θ -曲線や手錠グラフ、4 頂点完全グラフなどに対しては完全な不変量だとは断言できない。今後は空間グラフに関する新たな不変量の開発をしていきたい。

さらに、アンビエントアイソトピーによる分類だけでなく、他の同値関係（近傍同値など）を導入すると空間グラフはどのように分類されるかを調べたい。まず、私が作成した θ -曲線と手錠グラフの表にある空間グラフに対して取り組む。が、この場合もやはり不変量の開発が必要不可欠である。

最後に、空間グラフの両手型、つまり自分とその鏡像がアンビエントアイソトピーで移りあう空間グラフについても研究を進めていきたい。というのも、7 交点以下の素な θ -曲線には存在せず、手錠グラフにおいても 3 個しか存在しない特殊な性質だからである。両手型は高分子化学や分子生物学にも関連する事項であるので、興味を引かれるところである。